

作品「双～最上川～ 2007」 ―時間を刷りとる―

Work "Comparison of consistency ~ The MOGAMI ~ 2007"
- Time is printed and taken. -

若月 公平

WAKATSUKI Kohei

In this text, I look back at that time now at the time of passed two years, and self-verify what you tried to do by what being thought as for "The MOGAMI" of production in May, 2007 exhibited in a Yamagata museum 'Arising image' exhibition.

- Impressions of subject "Time"

- Work explanation

 - Outline

 - About the etching for the upper part

 - About lower black ground

- Three kinds of time

The painting is a geostationary there material, and no creation to own time voluntarily. It differs from the work that has peculiar time such as Music, literature, the image expressions, and dances, and the work waits for a momentary glance defenseless when meeting to those who appreciate the painting. Afterwards, the work is entrusted them with it at the time of those who appreciate and drifts in invisibility time.

The meaning is neither had, not talked about, and it is there at time to see the work and everything is nothing but there.

I make wanting is such a work.

はじめに

本稿は2007年5月制作、山形美術館『生まれるイメージ』展、出品の「双～最上川～ 2007」を2年経った現在、当時何を考え何をしようとしていたのか内省的に振り返るものである。

- 主題「時間」について雑感

- 作品解説

 - 概説

 - 上部 エッチング画面について

 - 下部 黒い画面について

- 三つの時間

主題「時間」について雑感

四十数年間都会で生活してきた私にとって、山形の数年間は豊かな自然に囲まれる生活環境であった。自然とは、遠くの月山や葉山の山並み、山形の町並み、近くの杉林、足元の草花などをとりまく一年の気候の流れ、月の満ち欠け、冬空の星座の瞬き、接する学生達が成長してゆく時間、山形に居る私を包み込む時間のすべてがそれであった。東京では人の行きかう街や住宅、電車や自動車が溢れる雑踏の渦中で棲息するように時計とカレンダーが示す時間と共に生活をしていた。そこでは正体不明の大きな怪物の一細胞としての役目を果たそうと私は蠢いていたように思える。

最上川の川面に佇むとき、水面は下流へ一方向に流れ時を刻む。舞う無数の雪は水面に吸い込まれてゆく。対岸の梢がざわめき野鳥の囀りが木霊す。一陣の風が私の頬をすり抜ける。そのとき、私は風に乗る、一羽の鳥、雪のかげら、一個の水の泡になり、すべてのものが私の

なかに浸透してゆきすべてのものが一体となる。私は私という生理学的物体をつき抜け時空間に漂う。山形の生活では、路傍のタンポポを見ると、雨だれを見ると、ふと学生の顔を見ると、いつも最上川の風が私の頬をかすめる。その一体感の刹那は刹那であるがために永遠になる。そして、芭蕉が下った最上川は今もそこにたうたう。

夏目漱石の「草枕」に以下の行がある。

「然し苦しみのないのは何故だろう。只この景色を一幅の画として観、一卷の詩として読むからである。画であり詩である以上は地面を貰って、開拓する気にもならねば、鉄道をかけて一儲けする了見も起こらぬ。只この景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補いにもならぬこの景色が景色としてのしみ、余が心を楽しませつつあるから苦勞も心配も伴わぬのだろう。自然の力はここに於いて尊とい。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。」(新潮文庫より抜粋 陶冶[とうや]:才能や人格を鍛えて立派につくりあげること 醇乎[じゅんこ]:たいへん純粋なこと)

作品が「自然」と同等のものになる。作品が一本のタンポポになる。一陣の風になる。そう望みたい。

作品解説

ー概説ー

画面は最上川の擬似的再現である。

「最上川」を造形的題材とし、上部、下部を銅版画技法と絵画的技法を対比的に用い「時間」「刹那、永遠」を内省的主題に制作したものである。

作品は1点120×120cmの画面を横に7点連ねた8.4mの構成である。個々の1点は60×120cm(タテ×ヨコ)の画面を上下に組み合わせた明暗対比と技法的対比で成り立つ。

上部のエッチングで描画した樹木は対岸の樹木を表わす。しかし、最上川の樹木は一本も描いていない。下部の黒い画面は最上川の流れを表わす。しかし、最上川のどここの流れでもない。

ー上部 エッチング画面についてー

エッチングの描画には数ヶ月の時間を要する。銅の板は腐蝕液に浸すことで凹版画の原版に変容する。百時間

を超える版上の行為は数十分の化学変化によって原版に生まれ変わる。腐蝕時間の加減で長時間の描画作業が失敗も成功もする。科学変化の力に委ねることは版の上で何が起きているのか不可視の時間である。その後、原版にインクをつめプレス機で紙に印刷することで初めて作品が突然眼前に現われる。プレス機で紙に加圧する時間は数分である。描画に費やされた膨大な時間と不可視の時間は最後の数分によって紙の上に昇華する。描画の時間、腐蝕の時間、プレスの時間、何れも作者の瞬間の感覚と行為の蓄積によって紙の上にそれぞれの時間が刷りとられる。

尚、原版はこの作品のために制作したものや5年10年20年前のものを使用し、複数の原版の部分を雁皮紙に刷りとり再構成した。よって、多年度に渡る作品部分が時空を飛び越え一枚の作品「双〜最上川〜2007」で同居する。

刹那は永遠をつなぎ留める。

最上川の対岸に茂る木々はゆったりとした時間を蓄え、季節ごとに葉の色を変え、冬には白く染まり、私たちが知らずに過ぎた時間の流れをはたと気付かせてくれる。

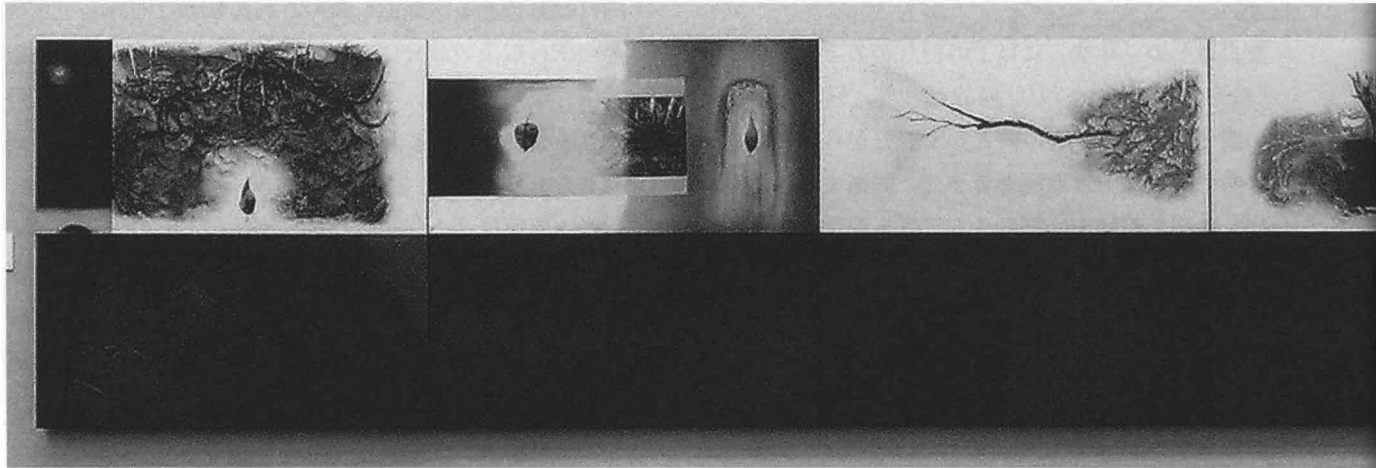
ー下部 黒い画面についてー

下部の黒い画面は、上部エッチングの時間堆積との対比として瞬時に及ぼした行為の軌跡を下部に配したものである。版画技法は僅かな部分のみ用い他は絵画的な手法による。

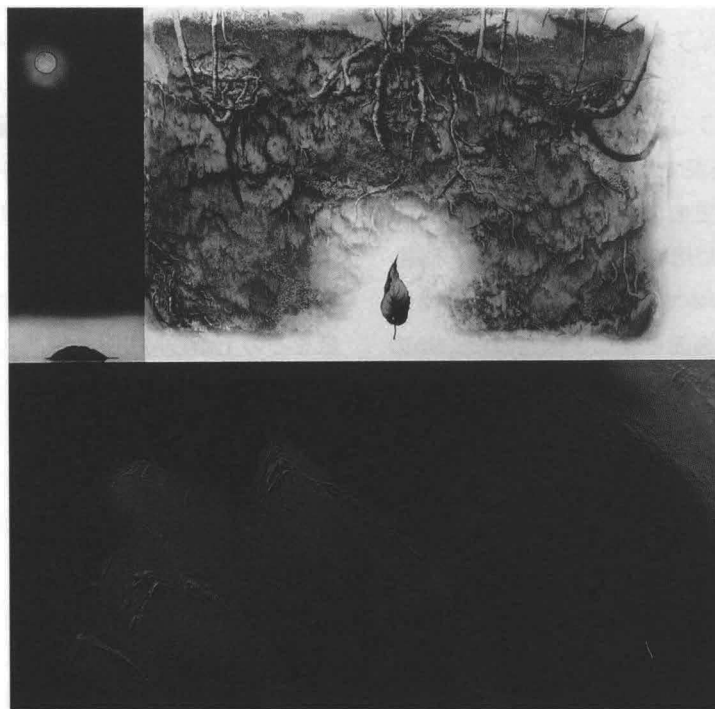
絵画材料の盛り上げ材を使用し、支持体になる紙の上に一過性のストロークを筆やペインティングナイフ等で盛り上げる。乾燥後、銅版画で真っ黒に刷り上げた雁皮紙をその上から貼り込み、黒に覆われたストロークの凹凸を作る。凸部を脱脂綿に付けた鉛筆の粉でこすり、黒地に一過性のストロークを明るく銀色に浮き出させる。そのときの心理状態と造形的欲求による瞬発的身体性に委ねられた手の動きは、硬質な物質感を伴った凹凸の動きとして定着される。上部の継続した数種類の時間堆積によって得られる間接的技法表現と異なり、瞬時の手の動きを直接的に留めた画面となる。

流れる瞬間は、そこに永遠を抽象的に視覚化する。

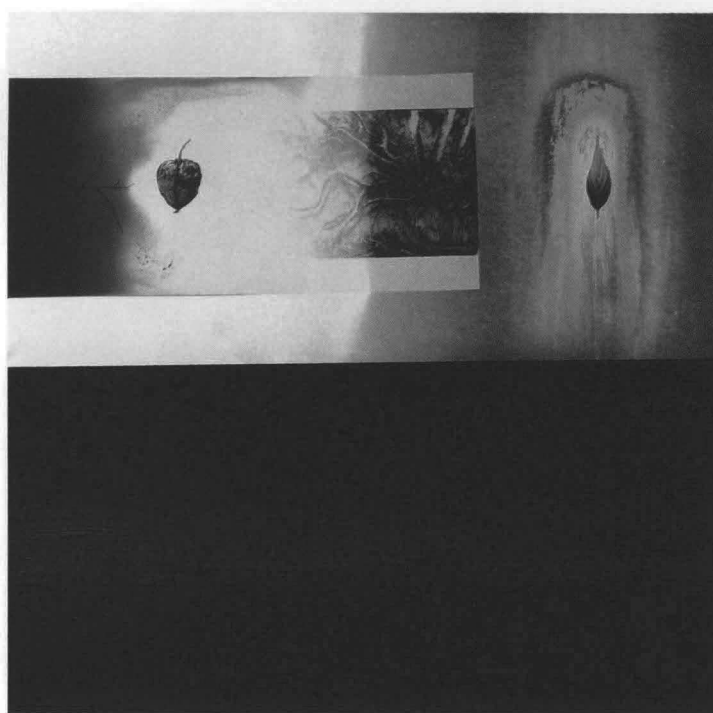
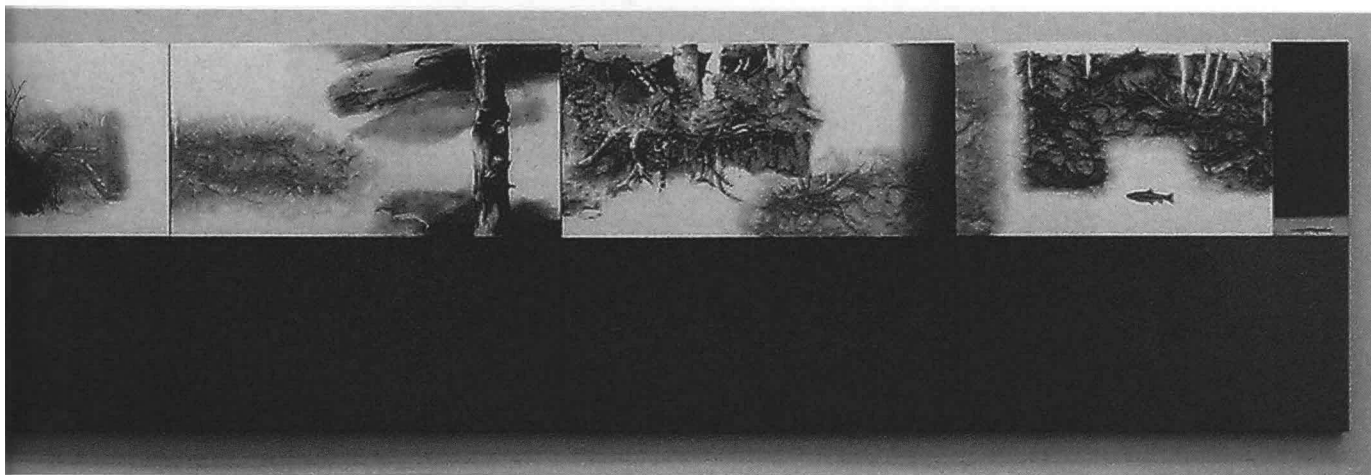
水面は滑らかに時には激しく下流へ移動し、水はそこには止まらず、流れは連続性の中でその在りようを見せ、継続する永遠の時間を絶えず私たちに示す。



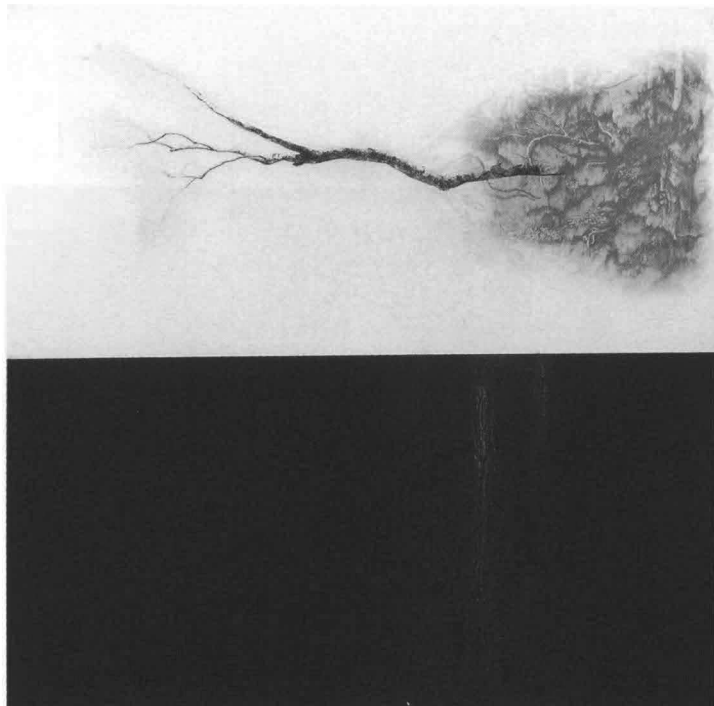
双〜最上川〜 2007 (120×840cm)



萌芽



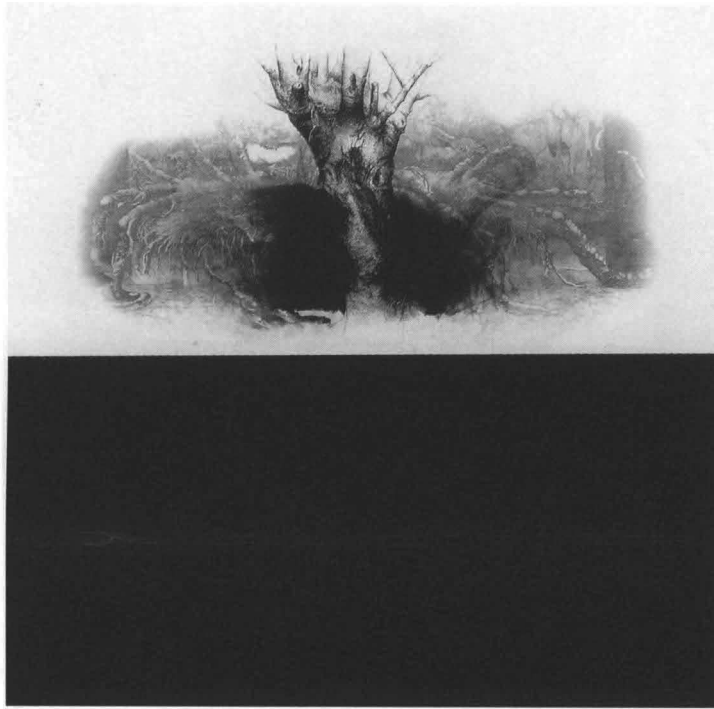
羊水



雷鳴



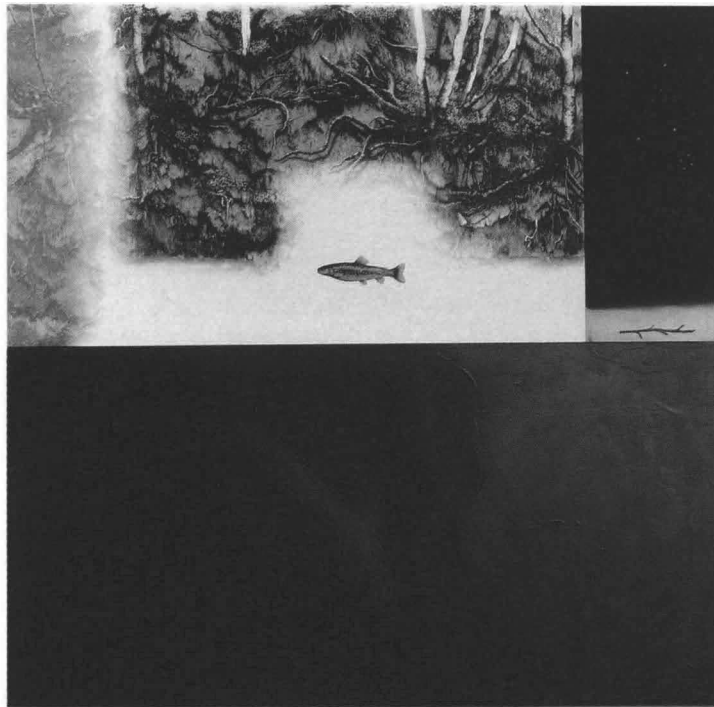
立脚



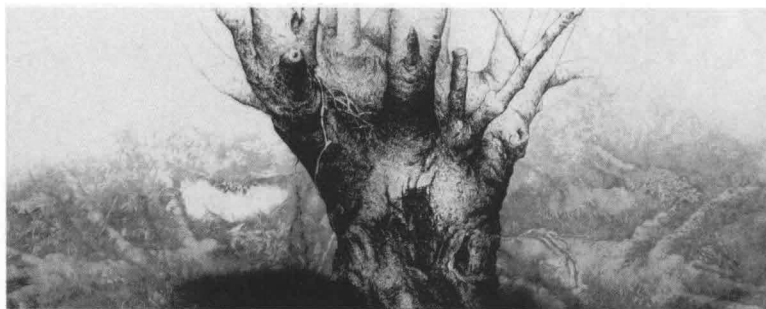
木靈



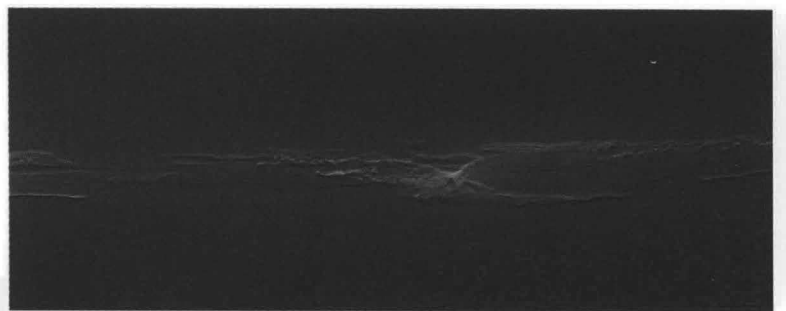
遠望



棲処



上部 部分



下部 部分

—三つの時間—

絵画はそこに静止した物質であり、自ら時間を所有する創作物ではない。絵画は音楽、映像表現、舞踊などそれ自体が時間を有する作品とは異なり、作品が鑑賞者と接するとき無防備に一瞥の瞬間を待つのみである。その後、作品は鑑賞者の持つ時間に委ねられ不可視の刻をたゆたう。文学もそれに近い成り立ちである。書かれた活字はそこに存在するが、読者に黙読されることでその作品は読者の中で活動し始め読み終えるまでの時間とその後、作者の思考と読み手の意識は遙か宇宙を彷徨する。

作品は個の産物である。表現するという。それは作者の感情、情感、思考、主張であろうけど作者の意志のみによってそこに表わされたものなのだろうか。個性、オリジナリティ、個の主張、自己顕示の鼓舞が表現のあり方なのだろうか。近年、疑問を抱く機会が多い。作品は表わすのか、現われるのか。私たちがいまここに居て作品が生み出されるコト自体が自然の時間が流れることによって起こるコトであり、作品は作者と接する環境とモノが作者という濾過器もしくは抽出器を通過した時間によって立ち現われる陽炎のような事象ではなかろうか。作品が存在するとき、私には三つの時間がそこにある。

作品を作り出そうとするとき、最上川の風が頬をすり抜け、私は「胡蝶の夢」の時間を旅する。

作品を作るとき、素材が作品に変容を遂げる刹那に私は手を動かしながら心震わせ立ち会う。

作品になったとき、作品は私の手を離れタンポポの胞子の如く風に乗れ、鑑賞者の脳裏の遙かな時間を漂い続ける。

作家としてこの三つの時間を得ることは、生きる上でこの上ない幸福を授かることのように思える。三つの時間は、この実社会の中で如何に機構の役目を果たすか切実な状況を抱えながら、尚且つ、自身の作品が美術としての立脚点を如何に持つのか作家としての問題をも、私をもってふわりと蝶のように飛び越えさせてしまうからである。

前出「草枕」には、またこのような箇所もある。

「^{むな}空しき家を、^{はるかぜ}空しく抜ける春風の、抜けていくは迎える人への義理でもない。拒むものへの^{つらあて}面当でもない。

^{おのずか}き
自^きら来たりて、自^きら去る、公平なる宇宙の^{こころ}意である。
^{たなごころ}あご
掌^{あご}に顎を支えたる余の心も、わが住む^{ごと}部屋の如く空しければ、春風は招かぬに、遠慮もなく行き抜けるだろう。」

刷り上がった紙をめくるとき、風が吹き抜け、人知れずタンポポが一本咲く。意味を強要せず饒舌にならず作品が、そして誰かが作品を観る時間が、只それらがそこにある。

そういう作品でありたい。

執筆者

若月 公平
WAKATSUKI Kohei

芸術学部 美術科
School of Art/Department of Fin Arts
教授
Professor

※作品撮影
岡部信幸（山形美術館）
岩月公平